

# 被災経験を通して知る水道の必要性と復旧

東北学院大学工学部  
教授 吉田 望

2011年東海地方太平洋沖地震では、自宅は津波による冠水被害を受け、避難所生活も送りました。

地震の被害調査を数多く行っている私は、被災地でのライフラインの重要性はよく理解しているつもりでした。特に水道は、生命維持に必要なだけではなく、トイレ、風呂、など、文化的な生活を送るに必要で、地震時に多くの水道事業者が考えておられる1日3リットルの生命維持のための水では不十分なことを、これまでも訴えてきました。

地震後は避難所でもあった職場で避難生活をしていました。自宅に戻ったのは停電が終わった10日後で、まだ断水していました。幸い近所の排水溝を流れていて地震直後は少しましであった水を風呂にためおいていましたので、夜だけの生活でしたが、トイレには困りませんでした。しかし、この水は飲めるような代物ではないので、料理等は全くできず、スーパーに行けば野菜も肉も魚も入手できるようになっても、購入意欲がわきませんでした。被害を受けた家の片付けをしても手も洗うことができません。トイレ、風呂だけではなく、生活を維持するための水の重要性を改めて感じました。

水が通ったのは、地震後3週間以上たってからです。水が通ると自宅の周辺でもやっと復旧活動が始まりました。津波で冠水し、その水が約1日半湛水していたため、敷地内にもまた床上にも泥がたまっており、その排出をし、家をきれいにするためには水は不可欠です。断水期間中は、津波に使った家財などは搬出できても、家の清掃もままならなかったわけです。これは、津波に限らず被害を受けたところは同様と思いますが、片付けるというのは捨てるということではなくきれいにするということで、そのためには水は必須です。ここでも、水の重要性を認識しました。

## 被災経験を通して知るライフラインの必要性

停電や断水が長引くと、いつ復旧するのか不安になります。幸い、多賀城市では職員が苦勞しておられることがよくわかるインターネット情報を流しておられ、そこには、断水している理由（七ヶ宿ダムから延々と引いている水路の上流から修理していく必要）、復旧の見込み（いつ頃通水の予定）などの必要な情報が書かれており、予定を立てることができました。ただ、広報はウェブだけだったようで、近所には知らない方も多くいらっしゃいました。私が、ウェブの情報を教えるだけで、ずいぶん頼りにされました。広報の内容はよかったと思いますが、方法にもう少し親切心があったらと思いました。

自宅の水道の復旧が遅れたのは、長い一本の線にライフラインを頼ったことが大きな原因です。冗長性を持たせる、ネットワーク化しておくなどの設備があれば、これほどにはならなかったと思います。将来に向けてこのような対策が必要ではないかと思いました。